

近代医学用語「痙攣」の成立と定着について

権 宇 琦

1. はじめに

現代医学用語で使われている漢語には、日中同形語が少なくない。そのうち、一部は中国伝統医学にある用語で、昔医学書が中国から日本へ伝来するとともに、用語も伝わり、日本語に定着したものである。また一部は、近代において、西洋医学を翻訳する際に、新たに作られた漢語が、いかにかして相手の側に伝わって、定着したものである。本稿では近代医学用語「痙攣」が日本で成立し、定着した過程を考察することを目的にする。中国語への流入、受容の状況の考察は、次回の課題にする。

本稿は「痙攣」という病気そのものの研究ではないが、医学専門書や国語辞典における「痙攣」の解説を見ることで、今日「痙攣」という語が何を表すかを把握できると考える。『内科学 第10版』では、「痙攣」を以下のように記述している。

【痙攣（症候学）】

痙攣は全身または身体の一部の筋群の不随意で発作性の収縮である。痙攣の原因となる病変部位としては、脳、脊髄、末梢神経、筋肉であり、神経—筋のどのレベルの異常でも起こりうる。また痙攣の原因となる病態は、炎症・感染、腫瘍、血管障害といった器質病変、電解質・代謝異常、脳循環障害など多岐にわたる⁽¹⁾。

痙攣は全身痙攣発作の意味でよく使われる。全身痙攣発作の病因には、急性の脳障害・代謝障害などに起因する急性症候性痙攣発作（acute symptomatic convulsive seizure）と、慢性疾患のてんかん発作（epileptic seizure）がある。痙攣の原因が脳疾患のこともあれば、全身性疾患（病態）の一症状として痙攣がみられることがある。痙攣は代表的なてんかん発作型ではあるが、てんかんには痙攣をきたす発作と、きたさない発作（欠神発作、複雑部分発作）がある。痙攣は一般用語でもあり、患者の訴えの「痙攣」はてんかん発作、不随意運動、有痛性の筋痙攣など多彩な症状が含まれる。痙攣の鑑別には、筋痙攣、破傷風、全身硬直（stiff-person）症候群、有痛性強直発作テタニー、半側顔面痙攣、チック、痙攣性失神も含まれる。いわゆるヒステリー発作も痙攣発作をきたす。精神的な要因による痙攣発作で、非てんかん性心因性発作（non-epileptic psychogenic seizure: NEPS）とよばれる。

また、『日本国語大辞典』第2版（以下『日国』と略す）では、

痙攣 [名] 筋肉が自然にひきつること。また、それにとまなうふるえ。からだ全体のもの、部分的のものがある。いろいろな脳の病気、毒物による中毒、貧血や脳の血液循環障害が原因でおこる。ひきつり。ひきつけ。

のように解説している。これらの記述を見ると、「痙攣」という語は、全身または身体の一部の筋肉が不随意でひきつることを指し、病名（熱性痙攣、半側顔面痙攣）でもあるが、もっと多様な病気（てんかん⁽²⁾、破傷風など）の症状の一つとして使われていることが分かる。また、和語「ひきつる⁽³⁾」との関連性が高いことが確認できる。

2. 「痙攣」の成立

2. 1 「痙攣」の語源

調査に当たって、まず『日国』における「痙攣」の用例を確認すると、そこでは以下の5例を挙げている。

- (1) 医語類聚〔1872〕（奥山虎章）「Convolution⁽⁴⁾ 痙攣」
- (2) 改正増補和英語林集成〔1886〕「Keiren ケイレン 痙攣」
- (3) 不如帰〔1898～99〕（徳富蘆花）下・九「其間々（あひあひ）には心臓の痙攣起り」
- (4) 妄想〔1911〕（森鷗外）「窒息するとか痙攣（ケイレン）するとかいふ苦みを覚えるだらうと思ふのである」
- (5) 桐の花〔1913〕（北原白秋）昼の思「その光った尻尾の尖の細かな緑色の痙攣を凝視（みつ）めてゐる」

『日国』の最初の用例は、『医語類聚』から取り上げられている。『医語類聚』は、明治6年（1872）に、海軍医官として活躍した奥山虎章によって編纂された英和医語辞典である。奥山は「例言」に、辞典の見出し語の原書は『動氏医用字書』⁽⁵⁾によったとし、訳語については、「…未だ名称ノ全ク欠ル者ハ権リニ之ヲ音訳シ或ハ原義ニ基テ之ヲ下シ」と述べている。要するに、当時は訳語が十分に整っておらず、奥山によるものがあるということである。

これだけ見れば、「痙攣」は奥山による造語であると思われるだろうが、今回の調査を通して、『医語類聚』より古い用例が見つかった。

考察の手がかりとなる書籍は、佐藤亨の『近世語彙の歴史的研究』である。「IV 近世訳語論」では、蘭学者が翻訳した医学書『解体新書』『西説医範提綱積義』『遠世医方名物考』などの訳語の源流について考察し、それを四つに分類している。

- 第一、漢籍もしくは漢訳仏典に典拠を有し、以前に本邦の文献に用例の指摘できるもの
- 第二、漢籍もしくは漢訳仏典に典拠を有するものの、国語として以前に用例があるか否か明らかでないもの
- 第三、漢籍または漢訳仏典に典拠を見いだすことができないが、以前に国語の用例が存するもの
- 第四、漢籍もしくは漢訳仏典に典拠を見出しえず、さらに国語の用例も確かでないもの

「痙攣」は、「第十六章 『遠世医方名物考』の訳語」で初めて登場し、第四に分類している。要するに、中国語から伝来したものでもなければ、日本語でも存在しなかったものである。そうすると、『遠世医方名物考』やその周辺を考察すれば、「痙攣」の語源に辿り着くと思われる。

『遠世医方名物考』は、文政5年(1822)に出版され、宇田川玄真が訳述し、宇田川榕菴が校補したものである。著者宇田川玄真は、蘭方医である宇田川玄随と父子の契を結んで、玄随から漢学と医学を学び、大槻玄沢や桂川甫周について蘭語を習ったといわれている。『遠世医方名物考』以外に、養父宇田川玄随が翻訳した『内科撰要』⁽⁶⁾に校注を加え、『増補重訂内科撰要』とし、『遠世医方名物考』と同じ年(1822)に刊行した。『内科撰要』と『増補重訂内科撰要』を調査したところ、「痙攣」は『内科撰要』に現れず、『増補重訂内科撰要』には、増補として加わっていることが判明した。本文は以下のとおりである(漢字の字体や、句読点・括弧類などは、現代日本語で通用しているものに変えて示す。以下同じ)。

痙攣拵掣篇第二十

痙攣、羅甸名「テタニウス」和蘭名「カラムプテレッキング」拵掣、羅甸名「コンヒウルシヲ」和蘭名「ストイプテレッキング」或ハ此ニ症通シテ羅甸ニ「コンヒウルシヲ」ト称ス。

「痙攣拵掣」は、原書『簡易治療術書』で確認すると、オランダ語「kramp-en⁽⁷⁾ stuip-trekking」に対応している。また上記によると、『増補重訂内科撰要』においては、「痙攣」は「kramp trekking」に対する訳語であり、「拵掣」は「stuip trekking」に対する訳語であることが明らかである。

次に1822年以前の蘭和辞書、寛政8年(1796)の『江戸ハルマ』(波留麻和解)、文化7年(1810)の『訳鍵』で「kramp trekking」を考察してみる⁽⁸⁾。すると、いずれの辞書とも「kramp trekking」は見えないが⁽⁹⁾、代わりに見出し語「kramp」について、表1のように書かれている。ついでに、オランダ語「stuip」に関する語釈も表1にまとめる。

表1 『江戸ハルマ』『訳鍵』に見る「kramp」「stuip」の語釈

| 年代 | 書名 | kramp | Stuip |
|------|---------|----------|------------|
| 1796 | 『江戸ハルマ』 | 神経の掣、引ツル | 神経拘急、驚癇、拵掣 |
| 1811 | 『訳鍵』 | 白脈ノ攣急 | 白脈ノ拘急 |

いずれも「痙攣」は見られない。以上の考察によって、「痙攣」は宇田川玄真による造語であると言えるかと思う。

2.2 どうして「痙攣」なのか

『増補重訂内科撰要』では、「痙攣搐掣」を、「漢医所謂痙、搐搦、痙瘓、驚風、掣引、踏攣、拘急、角弓、歹張及積聚衝逆の攣急抽掣等皆斯ニ属ス」と、漢方に相応する病状が多く挙げられている。オランダ語「kramp trekking」を翻訳する際に、すでに候補になりそうな言葉がこれほど存在するのに、宇田川玄真はわざわざ新しい言葉を創った理由としては、次の二つが考えられる。

1. 上記の言葉ではいずれも、精確に原文の意味を表現できないからである。
2. 翻訳するにあたって、新しい言葉を用いて、用語を統一したいと考えたからである。

では、まず『増補重訂内科撰要』における「痙攣搐掣」の解説を確認してみる。

痙攣搐掣ノ大較ヲ論ス

凡ソ我意ニ随テ運轉挙動ヲ為ス所ノ諸筋、自由ニ運動屈伸スルヲ能ハズ却テ、我意ニ逆テ自ラ攣急掣抽シ、或ハ胃及ビ腸ノ筋纖維ノ如キ、平常我意ニ随ハズシテ自然ニ運動スル者モ亦掣引攣縮ス是ヲ痙攣或ハ搐掣ト曰フ。

また「痙攣」と「搐掣」の違いについては、以下のように記述している。

別テ是ヲ言ヘバ其攣急、依然トシテ放解セズ、彊硬ニシテ緩弛セズ少シモ伸縮挙動スベカラザル症ヲ痙攣トス。唯其症発止往来アリテ頻頻ニ牽引掣抽スルヲ搐掣トス。

上記をまとめると、『増補重訂内科撰要』における「痙攣」は、体（筋肉、胃腸など）のひきつきだけでなく、さらにこわばっている症状があることに焦点を当てている。

ここで、「痙」と「攣」の意味を漢字辞典の記述によって確認する。

「痙」は、中国の『説文解字』には、「彊急⁽¹⁰⁾也。」とあり、『古代漢語詞典』（1998）には、「抽筋。《素問・至真要大論》：“諸痙項強，皆屬於湿”」とある。

日本の漢和辞典『漢字源』改訂第五版（2011）には、「（動・名）ひきつける。ひきつけ。筋肉がひきつる。」とある。

「攣」は、『古代漢語詞典』には、「③抽搐。《後漢書・楊彪伝》：“彪見漢祚将終，遂称脚～不復行，積十年。”」とある。

日本の漢和辞典『漢字源』改訂第五版（2011）には、「[二] ①レンす（動）つる。ひきつる。筋肉や関節がひっぱられたようになる。「痙攣」「拘攣」とある。

以上から、「痙」と「攣」は両方とも「ひきつる」という意味を持ち、「痙」はまた「こわばる」という意味を有していることが確認できる。そのゆえ、宇田川玄真はこの二つの漢字を組み合わせ、**「kramp trekking」**を翻訳したと推察される。また、『漢字源』改訂第五版の品詞性の記述により、「痙攣」の語構成は、「V+V」の並列関係であると判断できる。

3 医学書・辞書における「痙攣」の収録

3. 1 蘭学翻訳書・蘭和辞書への収録

調査によると、新造語としての「痙攣」は、『増補重訂内科撰要』以降に出版された蘭学翻訳書や蘭和辞書にすぐには反映されていない。医学翻訳書では、例えば、『医療正始』⁽¹¹⁾には見られない。蘭和辞書である、天保4年(1833)の『長崎ハルマ』(道訳法児馬)とその増補版『和蘭字彙』、『訳鍵』の増補版『増補改正訳鍵』でもう一度、「kramp」と「stuip」を調べた結果を、表2に示す。主に「攣急」「拘攣」などの用語を用いて訳語とし、「痙攣」を使用していないことがわかる。

表2 『長崎ハルマ』『和蘭字彙』『増補改正訳鍵』に見る「kramp」「stuip」の語釈

| 年代 | 書名 | kramp | stuip |
|------|----------|-------|----------|
| 1833 | 『長崎ハルマ』 | 攣急 | 拘攣、子供になる |
| 1858 | 『和蘭字彙』 | 攣急 | |
| 1864 | 『増補改正訳鍵』 | 白脉ノ攣急 | 白脉ノ拘急。拘攣 |

ただし、緒方洪庵の『扶氏経験遺訓』⁽¹²⁾では、「痙攣」を多用している。例えば、『扶氏経験遺訓』巻之九では、「刺発尼亜 (raphania⁽¹³⁾)」の治法について、

而四肢ノ痙攣劇痛ハ之ヲ逆圧シ或ハ緊シクシテ静止スルヲ得ヘシ。

『扶氏経験遺訓』巻之九

のように記述している。この段落をドイツ語原文とオランダ語訳の同じ段落を対照してみると、「痙攣」はドイツ語「krämpfe」⁽¹⁴⁾とオランダ語「krampen」の訳語であることがわかる。

Die Krämpfe und oft sehr schmerzhaften Zusammenziehungen der Glieder werden am besten durch Gegendruck und Binden erreicht.

『Enchiridion Medicum Oder Anleitung Zur Medizinischen Praxis』

De krampen en dikwijls zeer pijnlijke zamentrekkingen der ledematen worden het best door tegendrukking en binden verligt.

『Enchiridion medicum : handleiding tot de geneeskundige praktijk』

緒方洪庵は、宇田川玄真に学んだことがあったため、『扶氏経験遺訓』を作成する際に、『増補重訂内科撰要』か『遠世医方名物考』の影響を受けたと考えられる。

3. 2 英和辞書への収録(独和辞典を少し触れながら)

日本の開国後、蘭学はしだいに衰え、英学が盛んになる。そこで、英和・和英辞書における「痙攣」の収録を考察する。まず、『Cassell's English-Dutch, Dutch-English dictionary』(1960)で、「kramp」「stuip」に対応する英語を調べてみる。

すると「cramp」「spasm」「convulsion」が出てきた。ここで、19世紀から20世紀初期にかけて出版された英和・和英辞書で、上記の単語を調査した結果を、表3にまとめる。

表3 英和・和英辞書に見る「cramp」「spasm」「convulsion」の対照表

| 年代 | 書名 | Cramp | spasm | convulsion |
|------|-----------------------------|--|--------------------------------------|----------------------------------|
| 1814 | 『諳厄利亜語林大成』 | 拘攣 | | |
| 1830 | 『英和和英語彙集』 | コムラカエリ | | ツリケ |
| 1862 | 『英和对訳袖珍辞書』 | 攣急 | 攣急 | 拘攣 |
| 1867 | 『和英語林集成 初版』 | Tszri ; komuragayeri ; szkumu | Tszru ; hiki - tszkeru | Kyōfu |
| 1872 | 『和英語林集成 再版』 | Tsuri, hiki - tsuri , komuragayeri | Tsuru, hiki - tsukeru , keiren | Kyōfu , keiren , hikitsuke |
| 1873 | 『附音挿図英和字彙』 | | 痙攣、転筋 | 拘攣、激動、 騒動 |
| 1886 | 『和英語林集成 三版』 | Tsuri, hiki - tsuri, keiren | Tsuru, hiki - tsukeru , keiren | Kyōfu , keiren , hikitsuke |
| 1888 | 『いろは辞典：漢英対照』 | 痙攣、ひきつり、つりがみ | | 痙攣、ひきつり、つりがみ |
| 1900 | 『独羅英和医学字彙』 (15) | 痙攣、搐搦 | 痙攣、搐搦 | 痙攣、搐搦 |
| 1909 | 『和英辞典：新訳』 | 痙攣 | | 痙攣 |
| 1912 | 『哲学字彙：英独仏和』 ⁽¹⁶⁾ | | 痙攣 | |

表3に示すように、英和・和英辞書における「痙攣」は、1872年の『和英語林集成再版』における「spasm」と「convulsion」の訳語として初めて登場する。ただし、語釈の一番目にはなっていない。しかしそれ以降、『和英語林集成 三版』を除いて、全ての辞書に「痙攣」が収録されており、語釈の一番目として示されている。

3. 3 『医語類聚』による記述の問題点

ここで、改めて『日国』の最初の用例を振り返ってみる。

(1) 医語類聚 [1872] (奥山虎章) 「Convolution 痙攣」

2.3.2 で考察したように、「痙攣」に対応する英語は「cramp」「spasm」「convulsion」で、「convolution」はない。『医語類聚』の底本『A New Dictionary on Medical Science and Literature』を調査したところ、「convolution」は

Convolution (Anat.) Convolutio, from convolvere, to entwine⁽¹⁷⁾. Gyrus⁽¹⁸⁾.

のように記述されている。しかしこの解説によると、「convolution」は「痙攣」という意味を持っていないことが確認できる。

さらに、『医語類聚』では、「convolution」の次に「convulsibility」という見出し語が掲げられ、そこでは「搐搦」と訳されている。しかし、原書『A New Dictionary on Medical Science and Literature』を引くと、「convulsibility」は見出せず、名詞形の「convulsion」が見られた。「convulsion」はすでに2.3.2 で考察したが、奥山は、なぜ「convulsion」の代わりに、「convolution」の語積で「痙攣」を使用したのか、詳しい理由は不明である。綴りが似ているため、混同したのだろうか。

なお、上記の問題は、明治19年(1886)の『袖珍医学辞彙』にも反映されている。『袖珍医学辞彙』では、

Convolutio. 痙攣また皺襞

Convulsibility. 搐搦

のように、『医語類聚』とほぼ一致している。しかし調査を通して、「痙攣」は「convolution」の訳語になれないことは明らかである。

4 「痙攣」の汎用

4. 1 書籍から見る「痙攣」

国立国会図書館デジタルコレクションで(以下「国会図書館」と略す)「痙攣」を調べてみた。表示条件を「出版日を古い順」に絞り、検索結果をざっと見ると、一ページ目は一つの例外もなくすべて医学書からの用例であり、しかも主に翻訳書である。

「国会図書館」の最初の例は、『外科新説(独来氏)』のものである。これは、明治の医学者森鼻宗次がイギリスの医者ロベルト・ドロイの『袖珍外科新書』を翻訳したものである。1874年に出版された巻三では、「炎性痙攣(インフラマトリー・スパズム)」が一節として論じられており、ほかの巻(例えば巻十五 1875)でも、「閉肛筋痙攣」「痙攣性直腸狭窄」等のように、「痙攣」の使用が見られる。また、翻訳書では、例えば、高橋正純が訳した『対症方選』(1875)では、「頭痙攣」「心臓痙攣」、長谷川泰が訳した『小児科(斯泰涅爾)』(1876)では、「喉頭口痙攣」「声門帯痙攣」などの病名が見られる。

1900年前後には、「痙攣」は、翻訳書以外に、日本人の著作に多く見られるように

なる。例えば、『実用内科全書』（1899）では、「運動神経痙攣」、『鼻科学』（1899）では、「痙攣性嘔吐」などが見られる。

また、1888年の『鶏病治方』をはじめ、動物の病状説明する際にも「痙攣」を使用するようになっている。

「痙攣」は以上のように、病名の翻訳およびその具体的な病状の解説により、意味用法が理解され、だんだん医学学界に定着するようになったと推測される。

4. 2 文学作品に見る「痙攣」

2.1 で一度見たように、『日国』における「痙攣」の用例は五つあり、そのうち三例が文学作品から取り上げられている。青空文庫で確認すると、管見の限りでは、確かに『日国』が取り上げられているこの三例はより早期の使用例になる。

- (3) 不如帰〔1898～99〕〈徳富蘆花〉下・九「其間々（あひあひ）には心臓の痙攣起り」
- (4) 妄想〔1911〕〈森鷗外〉「窒息するとか痙攣（ケイレン）するとかいふ苦みを覚えるだらうと思ふのである」
- (5) 桐の花〔1913〕〈北原白秋〉昼の思「その光った尻尾の尖の細かな緑色の痙攣を凝視（みつ）めてゐる⁽¹⁹⁾」

青空文庫で、上記の原文を検索し、前後の文脈を調査したところ、『不如帰』と『妄想』は確実に病状を描写する際に用いたものであることが確認できた。ところが、『桐の花』の例は、猫の尻尾がひきつって、痛んでいる病状についての描写ではなく、ただ猫の尻尾が左右に揺れている状態を描写していると考えられる。このような表現は、宮沢賢治が書いた詩『棕櫚の葉やゝに痙攣し』にも見られる。『棕櫚の葉やゝに痙攣し』では、以下のように、「痙攣」を用いて葉っぱが少し揺れている状態を表している。

- (6) 棕櫚の葉やゝに痙攣し
陽光横目に過ぐるころ

（宮沢賢治 『棕櫚の葉やゝに痙攣し』⁽²⁰⁾）

文学作品における「痙攣」は、用例(3)(5)のような名詞の用法もあれば、用例(4)(6)のようなサ変動詞の用法もある。さらに、青空文庫で検索したところ、用例(7)(8)のような形容動詞と考えられる用例も発見できた。

- (7) 蜂は間もなく翅が利かなくなった。それから脚には麻痺が起った。最後に長い嘴が痙攣的に二三度空を突いた。

（芥川龍之介 『女』⁽²¹⁾）

- (8) 目玉を寄せ、眉根を寄せ、頬辺と口許とを歪めて、怒ってるのか笑ってるのか

分らない、痙攣的な顰め顔だった。

(豊島与志雄 『阿亀』⁽²²⁾)

4. 3 新聞に見る「痙攣」

新聞での使用を見るのに、今回は読売新聞のデータベースである「ヨミダス歴史館」を使って、1874年から1989年まで(明治・大正・昭和)の期間で「痙攣、けいれん、ケイレン」を入力して検索した。

読売新聞においては、「痙攣」の使用は、1876年11月13日の記事が最初である。

- (9) 又西尾村農吉田彦兵衛ノ牝牛ハ…午後四時ニ至リ全ク歹芻ヲ止メ行歩踉蹌四肢戦慄遂ニ痙攣ヲ発シテ斃レタリ。

(「島根県及び和歌山県の畜牛の疫病・死亡・予防の詳細」1876.11.13、朝刊)

調査を通して、明治・大正・昭和における「痙攣」の用例はそれほど多く見られない(「痙攣」を表記として使用した用例は36例、「けいれん」は36例、「ケイレン」は24例)。用法としては、4.2で検討したように、動詞や形容動詞の用法もあるが(1例ずつ)、主に名詞として、しかも用例(10)のように、「痙攣を起こす」というフレーズとして多用されている。

- (10) 其容態は突然卒倒して覚えば無くなり、顔面も全身も蒼白となりて、痙攣を起し、眼球を廻はし、歯を喰ひしぼり、口から泡を吹き…

(「神経の衛生 9」1906.6.19、朝刊)

なお、朝日新聞における「痙攣」の使用は、読売新聞より遅い。朝日新聞における「痙攣」は、1882年5月11日の広告で初めて見られる。

- (11) 私義昨七月来脳膜炎経攣症ヲ愁ヒ日々発症困苦シ四方ノ医薬便ニ効ナク死ヲ決シ候処不計海軍軍医從七位菅原先生ノ方劑ニテ日々快氣ニ向イ難有厚謝依テ該症ノ諸患へ此ノ良方アルヲ告ク。

(「脳膜炎痙攣症の治療効果 海軍軍医菅原先生の方劑」1882.5.11、朝刊)

用例(11)で注目しておきたいのは表記である。タイトルでは、「脳膜炎痙攣症の治療効果」とあるが、本文では、「経攣」という表記を使用している。文脈によると、この「経攣」は間違いなく「痙攣」として使用されている。しかし、「経」は、どの辞書を引いても、「ひきつる」という意味が載っていないため、「痙」と共用できるとはいえない。したがって、この「経」は誤植か、作者の書き間違いであると判断してもよいだろう⁽²³⁾。「痙攣」という表記を使用したのは、1888年2月19日の記事が最初である。

(12) …最急症所謂電撃性炎は毫も前なくして徴頭痛項背痛痙攣昏睡等の諸症頓発し時を移さずして斃る…

(「脳脊髄膜炎症候及経過概略」 1888.2.19、朝刊)

4. 4 国語辞典に見る「痙攣」の収録

最後に、国語辞典に収録された状況を調査する。明治期の代表的な国語辞書における「痙攣」の語釈を表4にまとめた。

表4 明治期の代表的な六つの国語辞書における「痙攣」の語釈

| 年代 | 書名 | |
|------|-------------|--|
| 1889 | 和漢雅俗いろは辞典 | (名) ひきつり、つりかがみ |
| 1891 | 言海 | (名) 医術ノ語、筋ノ引き釣ル事。 |
| 1893 | 日本大辞書 | (名) 漢語。病氣ノ名。体の筋肉ガ引き釣ルコト。「痛ニ由ツテけいれんヲ起コス。」 |
| 1897 | 日本新辞林 | (名) 疾病の名、筋肉の引き釣るもの |
| 1898 | ことばの泉：日本大辞典 | (名) 病の名。筋のひきつるいたみ |
| 1907 | 辞林 | (名) 筋肉の引きつること |

表4に示すように、「痙攣」は1889年の『和漢雅俗いろは辞典』にすでに収録されており、その後の辞書にも立項されている。また、品詞についてはいずれも名詞と掲載されており、動詞や形容動詞とは記述されていないことが確認できる。

5. 終わりに

本稿は、「痙攣」が日本で成立し、定着した経緯について検討してきた。全体をまとめると、まず「痙攣」は、江戸時代の蘭学者宇田川玄真が、「ひきつる」を意味するオランダ語「*kramp trekking*」の訳語として創出した和製漢語である。「痙」と「攣」は漢方ではともに「ひきつる」という意味を有していることから、この二つの漢字を選んだと考えられる。「痙攣」という語が確実に定着したのは、1870年代である。それは、英和辞書における「*cramp*」「*spasm*」「*convulsion*」などに対する訳語として「痙攣」が多く使われており、当時の外国医学書を翻訳する際にも、多用されていることから確認できる。その後、1880年ごろに新聞記事にも現れ、1890年ごろに国語辞書に収録されるようになった。さらに、1900年以降、医学以外の分野にも使用されるようになり、「ひきつる」という症状を指すだけでなく、「揺れている状

態」のような用法も文学作品に見られる。なお、辞書では「名詞」と掲載されているが、実際に動詞や形容動詞としても用いられている。

今後の課題としては、まず「痙攣」はいかにして中国へ流入したのか、その経緯について究明すべきだと考える。また、本稿においては、現代日本語における国語辞書の調査は、『日国』だけであったため、さらに増やす必要があると考える。ほかにも調査すべき資料があると思われるので、調査範囲を拡大し、研究の内容を一層充実させていきたい。

【注】

- (1) 『内科学 第10版』によると、全身痙攣の原因となるおもな疾患として、1.てんかん、熱性痙攣 2.中枢神経感染症 3.脳血管障害 4.脳腫瘍 5.頭部外傷 6.内科疾患 7.薬物 8.破傷風 9.アルコール離脱発作 10.子癇発作 11.熱射病、熱中症 12.非てんかん性心因性発作などがある。
- (2) 本稿の漢字の表記はすべて典拠による。以下同じ。
- (3) ひきつる【引攣】 (1) 痙攣(けいれん)を起こす。また、そのような状態になる。(『日国』第2版による)
- (4) 『医語類聚』における見出し語「Convolution」については、3.3で検討する。
- (5) 奥山虎章に関しては、深瀬泰旦(1996)に詳しい。『医語類聚』は、奥山がダングリソン Robley Dunglison (1798-1869)の医語辞典『動氏医用字書』(A New Dictionary on Medical Science and Literature)を典拠にして、医学術語を解説する辞典である。
- (6) 『内科撰要』は、宇田川玄随が一人の力で訳した最初の内科医書である。寛政8-9(1796-1797)に出版された。原書はオランダ人我爾徳兒(Johannes de Gorter)による『簡易治療術書(Gezuiverde geneeskunst, of kort onderwys der meeste inwendigezichten : ten nutte van chirurgyns, die ter zee of velde dienende, of in andere mstandigheden, zig genoodzaakt vinden dusdanigeuzichten te behandelen)』で、1744年に出版された。
- (7) 「en」は複数を表す。『講談社オランダ語辞典』(1994)によると、「複数形の作り方は、オランダ語の名詞の複数形は、単数形に-en または-sを付加して作られているが、原則は-enの付加である。」である。
- (8) 蘭和辞書について、永嶋大典(1970)、沖森卓也編(2017)に詳しい。
- (9) 『江戸ハルマ』では、「kramp」と「trekking」が掲げてあり、「trekking」は「引」とある。『訳鍵』では、「kramp」のみ掲げている。
- (10) 彊急：亦作“強急”。僵硬，伸展不能自如。彊，通“僵”。(『漢語大詞典』(2001)による)
- (11) 『医療正始』(1835-1847)は、Bischoff(独 1784-1850)著の内科書(オランダ語訳版)を伊東玄朴が翻訳したもので、全24巻である。訳者の伊東玄朴は、長崎でシーボルトに学び、お玉ヶ池種痘所設立のために拠金した83名の蘭方医のうちの一人。文久2年より、西洋医学所(種痘所の改称)の取締を務めた。
- (12) 扶氏経験遺訓』は、緒方洪庵がベルリン大学内科教授フーフランド(Christoph Wilhelm Hufeland)の『医学必携』(Enchiridion Medicum Oder Anleitung Zur Medizinischen Praxis, 1837)によるオランダ語語訳『Enchiridion medicum : handleiding tot de geneeskundige praktijk』(1841)を重訳したものである。安政4年

- (1857)に刊行された。『扶氏経験遺訓』は、江戸時代の刊本西洋内科書として最も完備したものとされている。
- (13) raphania n ラファナス中毒 (=rhapthania) 《セイヨウノダイコン [Raphanus raphanistrum] の種子による中毒》。(『医学英和辞典 第2版』(2008)による)
- (14) 「krämpfe」は「krampf」の複数形。よって、オランダ語の語積も複数形の「krampen」を用いる。
- (15) 『独羅英和医学字彙』の本文は、「krampf m. Spasmus, convulsio Spasm, convulsion, cramp. 痙攣、搐搦」となっている。
- (16) 『哲学字彙：英独仏和』では、「cramp」と「convulsion」は、見出し語に立項されていないが、「spasm」の語積として現れている。また、『哲学字彙』初版(1881)と増補版(1884)のいずれにも、「cramp」「spasm」「convulsion」は収録されていない。
- (17) entwine v. t. (物を) (…に) まつわらせる、絡ませる (『ランダムハウス英和大辞典』(小学館)による)
- (18) gyurus n. 回、脳回 (『医学英和辞典 第2版』(2008)による)
- (19) 『桐の花』の原文は、「乳酪の猫がまだ夢みるやうにその光つた尻尾の尖の細かな緑色の痙攣を凝視めてゐる。」とある。
- (20) 用例(6)の引用は、『新修官沢賢治全集』第六卷(筑摩書房、1980)による。『棕櫚の葉やゝに痙攣し』の具体的な成立年代は不明であるが、著者の生没年(1896-1933)から、この作品は明治後期から昭和初期の間に完成したと推測される。
- (21) 用例(7)の引用は、『芥川龍之介全集3』(筑摩書房、1986)による。『女』の具体的な成立年代は不明であるが、著者の生没年(1892-1927)から、この作品は明治後期から大正期の間に完成したと推測される。
- (22) 用例(8)の引用は、『文藝春秋』(1925)による。
- (23) 管見の限り、ほかの資料でも、「経攣」という表記は一例も見あたらなかった。

【参考文献】

- 荒川清秀(2000)「「健康」の語源をめぐって」文学・語学 166号 全国大学国語国文学会
- 沖森卓也編(2008)『図説日本の辞書』おうふう
- 沖森卓也編(2017)『図説近代日本の辞書』おうふう
- 王敏東・許巍鐘(2005)「「扁桃腺」という言葉の成立について 付：関連語彙にも触れながら」『国語語彙史の研究』第24号 大阪大学
- 梶輝行(2019)「ゴルテルの蘭書」「ゴルテル『簡易治療術書』の翻訳書」2019年科学技術週間展示会「長崎に関わる本」—輸入西洋科学書と翻訳書—
- 佐藤亨(1980)『近世語彙の歴史的研究』桜楓社
- 鄒文君(2016)「反転語「素因」・「因素」について：語彙史を中心に」『立教大学大学院日本文学論叢』第16号 立教大学
- 杉本つとむ(1961)「近代日本語の成立 —洋学との関連において—」『国語学』46
- 高野繁男(1983)「医学用語における語基と基本漢字—『医語類聚』の訳語」『人文学研究所報』第17号 神奈川大学
- 陳力衛(2016)「なぜ日本語の「気管支炎」から中国語の“支気管炎”へ変わったのか」『日中語彙研究』第6号 愛知大学中日大辞典編纂所

- 永嶋大典 (1970) 『新版 蘭和・英和辞書発達史』 講談社
 深瀬泰旦 (1996) 『『医語類聚』の著者 海軍大軍医 奥山虎章』 日本医史学雑誌 42 卷 1 号 日本医
 史学会
 真柳誠・友部和弘 (1992) 「中国医籍渡来年代総目録 (江戸期)」 『日本研究』 7 号
 46 集 日本語学会
 矢崎義雄 編 (2013) 『内科学 第 10 版』 赤松直樹・辻貞俊一「瘧疾」の項目 朝倉書店
 山田孝雄 (1940) 『国語の中に於ける漢語の研究』 宝文館

【辞書類】

対訳辞書類

- 『諳厄利亜語林大成』 (1814 完成 1976 年出版) 雄松堂書店
 『医学英和辞典 第 2 版』 (2008) 研究社
 『いろは辞典：漢英対照』 (1888) 長尾景弼
 『英和和英語彙集』 (1830) BATAVIA
 『英和对訳袖珍辞書』 (1869) 蔵田屋清右衛門
 『講談社オランダ語辞典』 (1994 年) 講談社
 『小学館ランダムハウス英和大辞典 第 2 版』 (1994) 小学館
 『袖珍医学辞彙』 (1886) 伊藤誠之堂
 『デジタル和英語林集成』 明治学院大学図書館
<http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/>
 『哲学字彙：英独仏和』 (1912) 丸善
 『独羅英和医学字彙』 (1900) 南江堂
 『附音挿図英和字彙』 (1873) 日就社
 『和英辞典：新訳』 (1909) 三省堂
 『Cassell's English—Dutch, Dutch—English dictionary』 (1960) F. P. H. Prick van Wely

国語辞書類

- 『言海』 (1891) 大槻文彦
 『ことばの泉：日本大辞典』 (1898) 大倉書店
 『辞林』 (1907) 三省堂
 『日本国語大辞典』 第二版 (2003) 小学館
 『日本大辞書』 (1893) 日本大辞書発行所
 『日本新辞林』 (1897) 三省堂
 『和漢雅俗いろは辞典』 (1889) いろは辞典発行部